

望まない妊娠で生まれた子どもの 乳児院での処遇に関する研究

(分担研究：望まない妊娠で出生した児及び母親のケアに関する研究)

研究協力者：庄司順一¹⁾

共同研究者：帆足英一²⁾

要約：乳児院に入所した児のうち、望まない妊娠が関与していると考えられる児の状況を知るために、まず、入所理由が「遺棄」あるいは「虐待」の児の過去20年間における推移を、全国乳児院協議会の入所状況調査により検討した。その結果、年度によって変動はあるものの、「遺棄」のケースは昭和40年代後半から50年代半ばにかけてやや減少傾向にあったが、50年代後半からは漸増傾向にあるように思われた。これに対して「虐待」のケースでは、徐々にではあるが、一貫した漸増傾向が認められた。次に、一乳児院における「望まない妊娠」が関係した事例の予備的な検討を行った。その結果、「望まない妊娠」に関係する要因として、未婚、あるいは婚外の妊娠、若年の母親などが考えられること、また母親自身の生育歴を検討する必要があることが示唆された。ただ、未婚で、望まない妊娠であったにもかかわらず、出産後母乳を与えることによって子どもへの強いアタッチメントが形成された事例があり、児に対する態度は変化し得るものであることが指摘された。

見出し語：望まない妊娠、乳児院、遺棄、虐待、マターナル・アタッチメント

研究目的：乳児院に入所した児のうち、望まない妊娠が関与していると考えられる児の状況を知るために、まず、乳児院入所理由が「遺棄」あるいは「虐待」の児の約20年間における推移を検討した。次に、望まない妊娠に関係する要因を明らかにするために、事例の検討を行った。

対象および方法：乳児院入所理由の推移については、全国乳児院協議会の「入所状況調査」により、1972年度（昭和47年度）から1992年度までの20年間の分析を行った。事例の検討は、一乳児院において筆者がかかわった事例のうち、「望まない妊娠」が比較的明確に関係している

1)日本総合愛育研究所 2)都立母子保健院

(単位：人)

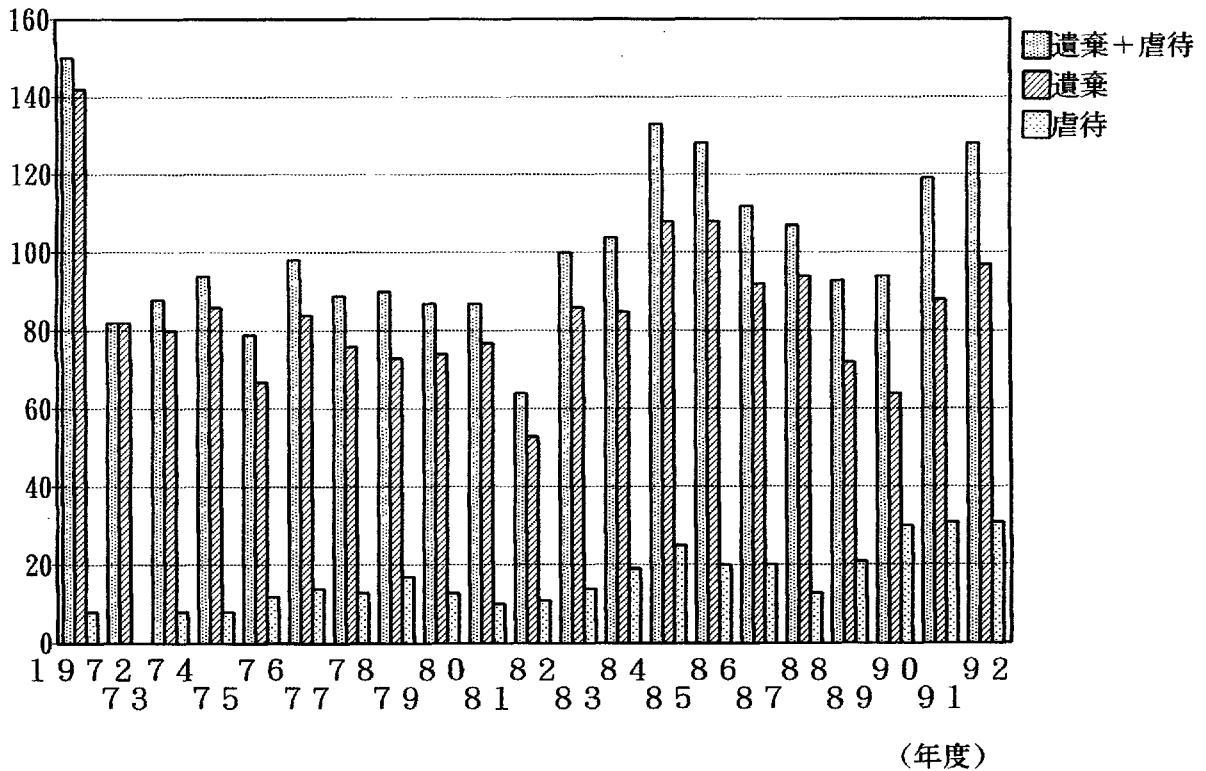


図1 入所理由が「遺棄」あるいは「虐待」の件数の推移

(単位：%)

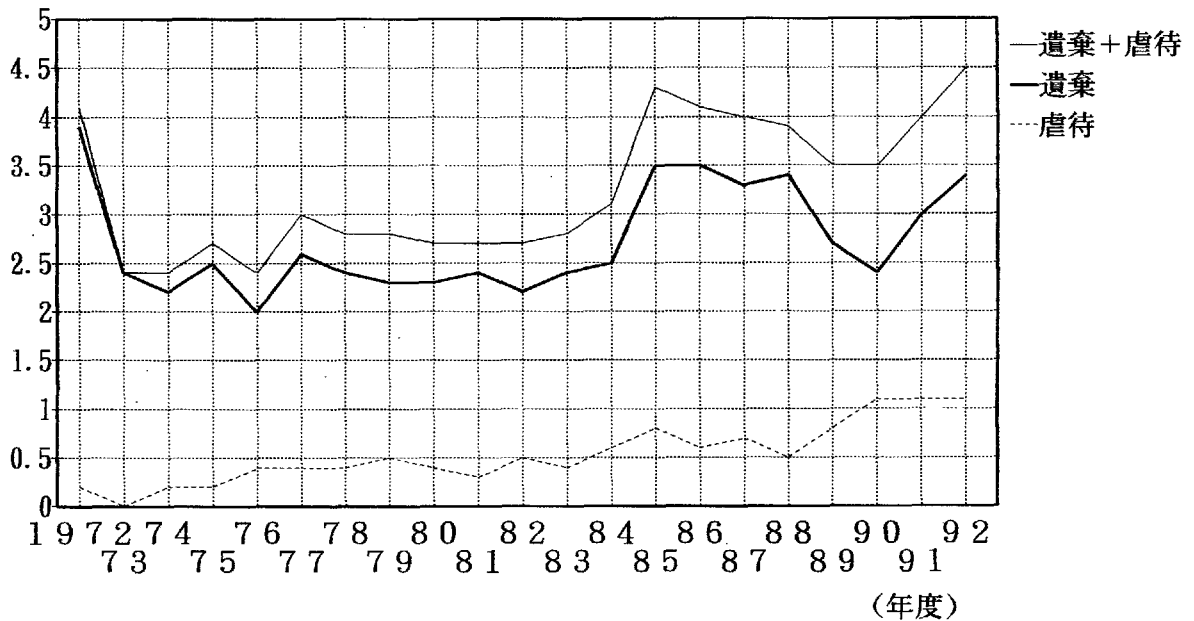


図2 入所理由に占める「遺棄」あるいは「虐待」の頻度の推移

と考えられた5例について、検討を行った。

「虐待」の児の過去20年間における推移について、まず実数に関しては、図1に示したように、

結果：乳児院入所理由が「遺棄」あるいは

1972年度（昭和47年度）は「遺棄」あるいは

「虐待」は150件であったが、70年代半ばから80年代前半にかけては90件前後と、年度により多少の増減はあるものの、やや減少傾向にあった。しかし、83年度から100件を超え、その後は、89年度および90年度にはやや減少したが、全体として漸増傾向にあるようであり、とくに最近は増加の傾向がうかがえる。

入所理由を「遺棄」と「虐待」とに分けて検討すると、「遺棄」の方が件数が多く、「遺棄」および「虐待」の変動は、おおむね「遺棄」の変動を反映したものといえる。しかし、「虐待」は72年度8件であり、80年代半ばまで20件以下であったが、この20年間、わずかずつではあるが、一貫した漸増傾向がみられる。80年代後半は年20件前後、そして90年代にはいつてからは30件を超えている。

全入所児に占める頻度もほぼ同様の傾向がみられた(図2)。すなわち、「遺棄」および「虐待」は80年代半ばまではほぼ一定であるが、89年度、90年度でやや低下したことを除き、最近頻度が高くなっている。入所児に占める頻度においても「虐待」はわずかずつではあるが、一貫して増加傾向にあることがうかがえる。

次に、「望まない妊娠」に関係すると思われる要因を検討するために、事例の検討を行う。

事例1 住宅の玄関わきに、新生児がタオルにくるまれてダンボール箱にいれられて放置されているところを、泣き声に気づいた住人が発見。病院に保護されたのち、乳児院に入所となった。その後、母親は発見されたが、バーホステスをしていて未婚。養育の意志はなく、面会にもこなかった。児の発育・発達は順調であり

2歳をすぎたところで、里親に委託された。

事例2 臍の緒と胎盤をつけた裸の状態で、ビニール袋にいれられて駐車場で自動車の下に置かれていたところを近隣の人が発見、病院に保護され、のちに乳児院に入所となった。発見が少し遅れたり、自動車を動かしたりすれば、児の生命は危険であったろう。親は不明。児は発達がやや遅れており、養護施設へ措置変更された。

事例3 病院にて出産。低出生体重児のため未熟児室へ入院。母親は先に退院し、しばらくは面会にきていたが、10日ほどでこなくなり、所在不明となった。児は乳児院に入所となった産科の記録によれば、母親は10代で結婚、5年後に離婚。その後、妻子ある男性と付き合い、妊娠して別れたらしい。児は乳児院で順調に発達したが、2歳をすぎて養護施設に措置変更となった。

事例4 自宅で出産。救急車にて産院へ運ばれ、入院した。退院後、母子寮に入寮したが、まもなくそこをとびだした。その後、母親はバーホステスをし、児はベビーホテルにあずけられることが多かった。しかし、児が熱を出し、ベビーホテルであずかってもらえなくなり、知人宅へあずけられた。数日間は、児の顔を見にきたが、その後こなくなり、所在不明となる。困った知人が児童相談所に相談し、乳児院入所となった。母親は19歳。父親は不祥。母親は、自身、親の病気のために養護施設へ入所し、6歳のとき別の養護施設へ措置変更され、小学校卒業までそこにいた。その後、家庭へ引き取られたが、うまくいかず、中学校卒業後は複数の

複数の男性と交遊し、18歳で第1子を出産、しばらくして知人宅へ置き去りにした。ほぼ1年後、本児も同様に知人宅へ置き去りにした。本児は乳児院で順調に発達したが、2歳をすぎて養護施設へ措置変更となった。

事例5 母親は大学1年のとき妊娠。相手の男性も大学生であった。妊娠して男性は別れてしまった。家族に打ち明けたときすでに人工妊娠中絶はできず、家族からは里子に出すように説得され、本人もそのつもりになった。しかし、出産後、母乳を与えているうちに、児への強い愛着（マターナル・アタッチメント）が生じ、「別れられなく」なり、自分で育てることを決心した。しかし、生活基盤がなく、養育の困難であるため、児を乳児院に入所させた。その後、定期的に面会を重ね、卒業と同時に、児を引き取って保育所に入所させ、自身はOLとなった。児を引き取るころには、祖父母もそれを認めた。母親の育った家庭は両親が離婚していたが、母親とその継母との関係が良好で、生活の場が比較的安定していたことが、母親の本児との関係形成やその後の引き取りに重要であったと考えられる。

考察：乳児院に入所した児について、望まない妊娠が関係しているか否かを直接知ることは困難であるために、今回は入所理由が「遺棄」あるいは「虐待」である場合について検討を行った。まず、最近の動向を知るために、「遺棄」あるいは「虐待」の児の過去20年間の推移を検討した。ここでは、とくに「虐待」の件数およ

び頻度が少しずつではあるが増加してきていた。

次に、「望まない妊娠」に関連する要因を明らかにするために、事例を検討したが、当然のことながら、「遺棄」の場合には父母が不明で、父母については情報が得られないことが多い。しかし、今回の予備的な検討からも、「望まない妊娠」に関係すると思われるいくつかの要因が示唆される。すなわち、未婚、あるいは婚外の妊娠、若年の母親、などである。また、これらの事例では、母親自身が安定した家庭環境で育っていない可能性があり、母親の生育歴の検討も必要であろう。

今回の検討は、望まない妊娠が関与していると考えられる事例について、遺棄の状況、親の状況、児のその後の経過等についての見通しを得るために行ったもので、系統的なものではなかった。今後、より詳細に、系統的に事例を積み重ねることによって、望まない妊娠に関係した要因が明確になるであろう。

ただここで指摘しておきたいのは、未婚で、望まない妊娠であったにもかかわらず、出産後母乳を与えることによって子どもへの強いアタッチメントが形成され、母親の生活が安定するまで児を乳児院に入所させたが、のちに家庭引き取りが可能になった事例があったことである。妊娠・出産や児に対する気持ちは変化し得るのである。そして、そのような変化を可能にする条件として、周囲のサポートが重要であろう。この点に関しても、事例の検討を重ねていくことが必要である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳児院に入所した児のうち、望まない妊娠が関与していると考えられる児の状況を知るために、まず、入所理由が「遺棄」あるいは「虐待」の児の過去 20 年間における推移を、全国乳児院協議会の入所状況調査により検討した。その結果、年度によって変動はあるものの、「遺棄」のケースは昭和 40 年代後半から 50 年代半ばにかけてやや減少傾向にあったが、50 年代後半からは漸増傾向にあるように思われた。これに対して「虐待」のケースでは、徐々にではあるが、一貫した漸増傾向が認められた。次に、一乳児院における「望まない妊娠」が関係した事例の予備的な検討を行った。その結果、「望まない妊娠」に関係する要因として、未婚、あるいは婚外の妊娠、若年の母親などが考えられること、また母親自身の生育歴を検討する必要があることが示唆された。ただ、未婚で、望まない妊娠であったにもかかわらず、出産後母乳を与えることによって子どもへの強いアタッチメントが形成された事例があり、児に対する態度は変化し得るものであることが指摘された。